



Title	パスカル『パンセ』草稿 « premier jet » における 加筆修正 : セリエ版断章124、断章192
Author(s)	三原, 大輝
Citation	Gallia. 2024, 63, p. 3-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95754
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パスカル『パンセ』草稿 «premier jet» における加筆修正 —— セリエ版断章 124、断章 192¹⁾ ——

三原 大輝

1. はじめに

ブレーズ・パスカルの『パンセ』(1670年)は、独特の背景を持つ未完の書物である。彼は生涯の最後の数年間で、著作を準備していたと言われている。しかし、彼の早すぎる死後、残されたのは文章が記された様々な長さの、前後の関連性が不明確なメモ書きが綴られた束であった。この遺稿は出版のための整理が全く施されていない。したがって、『パンセ』草稿には「決定稿」は存在せず、執筆途中の状態がそのまま残されている。

このような背景を持つ『パンセ』草稿の読解の枠組みとして、1964年に前田陽一によって「複読法」という読解手法が考案された²⁾。前田によればパスカルは文章を書き終えた後、一定の時間を置いてから手を加える方法を他人に薦めていた。そしてパスカル自身もこの方法を実践していたという。彼独自の原稿執筆法として、初稿を書き終えた後、後日加筆修正のために行間や余白を利用していたとすれば、彼は十分な余白を確保して文字を記しているという。特に、直ちにテキストを修正する場合、彼は同じ行の後ろに修正内容を書き、不要な部分は横線で取り消していたことが想定される。したがって、余白の加筆、修正を無視することで初稿を読み取ることができ、加筆修正を全て取り入れることで最終稿を読むことが可能であるという。この手法は後に改良され湊野正満によって「多重複読法」が考案された³⁾。これらの手法の出現によって『パンセ』草稿は、初稿、最終稿、時には第二稿、第三稿…と複数のテキストを内在していると指摘されている。

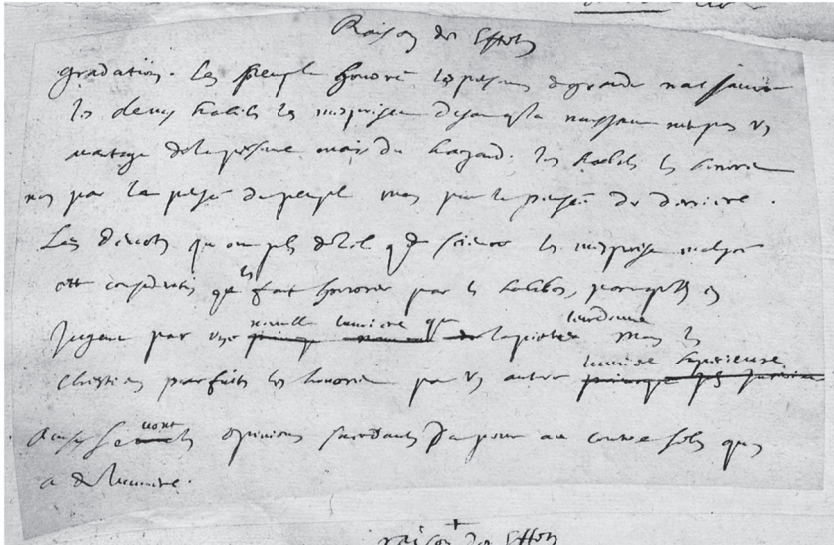
しかし、『パンセ』草稿の中には、文章作成時に後日の推敲の際のやり方でテキストが修正されている例が散見される。本稿ではセリエ版断章 124 と断章 192⁴⁾を取り上げ、文章作成時における加筆修正の過程を検討する。そして、従来「初稿」として指し示されていたテキストの性質について整理を行う。

1) 本稿は JSPS 科研費 23KJ1504 による研究成果の一部である。

2) Yoichi Maeda, «Le premier jet du fragment pascalien sur les deux infinis», dans *Études de Langue et Littérature française*, n° 4, 1964.

3) Masamitsu Horino, «Les trois écrites que la 'plurilecture' a permis de reconstituer à partir du manuscrit du Divertissement», dans *Courrier du Centre international Blaise Pascal*, n° 36, p. 13-26, 2014.

4) 『パンセ』の断章番号は Pascal, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris, Librairie Générale Française, «La Pochothèque», 2004 に基づく。

II. 断章 124 (RO⁵), p. 231)

Raison des Effets

gradation. les [so]peuple honore les personne de grand naissance
 les demy habiles les mesprisent disant que la naissance n'est pas Vn
 avantage de la personne mais du hazard. les habiles les honorent
 non par la pensè du peuple mais pour la pensée de derriere.
 Les deuots qui ont plus de Zele que de science les mesprisent malgré
 cette consideration qui ^{les} fait honorer par les habiles, parce qu'ils en
 Jugent par vne ^{nouvelle lumiere que} {principe} {nouveau} {de} la pieté ^{leur donne} mais les
 Chrestiens parfaits les honorent par Vn autre ^{lumiere superieure} {principe} {plus Interieur}.

Ainsy se uont ^{ont} les opinions succedants [s]du pour au Contre selon qu'on
 a de lumiere.

断章 124 では行間や余白を用いて加筆修正が行われている。これらの加筆修正
 は複読法によれば、初稿が書かれた後、後日に施されたものであるという。しか
 し、中には例外も存在する。まず本断章の最後の状態を確認し、次いで順に加筆

5) *Recueil des originaux des Pensées*, Bibliothèque nationale de France, département des
 Manuscrits, Français 9202 (RO と略記する)。

修正が施された箇所を確認する。

断章 124 修正が施されたテキスト

Raison des Effets

gradation. les peuple honore les personne de grand naissance les demy hables les mesprisent disant que la naissance n est pas Vn auantage de la personne mais du hazard. Les habiles les honorent *non* par la pensé du peuple mais pour la pensée de derriere. Les deuots qui ont plus de Zele que de science les mesprisent malgré cette consideration qui les⁶⁾ fait honorer par les habiles, parce qu Jls en Jugent par vne *nouvelle lumiere que la pieté leur donne* mais les Chrestiens parfaits les honorent par Vn *autre lumiere superieure. Ainsy se uont⁷⁾ les opinions succedants du pour au Contre selon qu on a de lumiere.*

(斜体は加筆修正が施された箇所)

現象の理由

段階。民衆は高貴な生まれの人々を敬う。生半可な巧者たちは生まれは人の長所ではなく偶然のものであると言い、高貴な生まれの人々を軽蔑する。巧者たちは民衆の考えによってではなく、裏の考えによって高貴な生まれの人々を敬う。信仰家たちは、巧者たちによって高貴な生まれの人々が敬われるというこの考察にもかかわらず、知識よりも熱意を多く有しているので、高貴な生まれの人々を軽蔑する。なぜなら、信仰家たちは信仰が与えた新しい光によって判断するからである。しかしながら、完全なキリスト教徒たちはより上位の他の光によって高貴な生まれの人々を敬う。このようにして、有している光に応じて、意見は正から反へ相次いでいる。

本断章には、複読法による草稿読解の枠組みでは初稿を読み取ることの困難な箇所がある。それは、「Les habiles les honorent non par la pensé du peuple」の箇所である。この「non」の部分は、左側の紙片の余白に記されているため、複読法によれば推敲の際に施された後日の加筆であるとされる。しかし、複読法の考案者である前田も認めるように、これは初稿のテキストであると考えられる。その根拠は、この「non」を取り除いて読み進めると、「Les habiles les honorent par la pensé du peuple mais pour la pensée de derriere」となり「mais」があるために文意が通らないからである。「non」の追加について、次のように推定される。テクス

6) «les» は行間の余白に追加されている。この箇所はパスカル原稿執筆法によれば後日の推敲の際に追加されたことになるが、最初にテキストを書き付けている際に意味を正確にするために追加されたとも推測される。そのため、転写では書き付けのテキストと同様に黒色で示した。

7) «uont» は行間の余白に追加されている。この箇所について前田は「その下にある横線で消された語は、トゥルノール一冊本の註に記されているように同じ語である可能性が多い。従って他の語にしようといったん思って消したが、適当な語が見つからないので元のままにしたか、字体がはっきりしないので、改めてはっきり書いたかのいずれかであろう（前田陽一「意見の漸次的移行（下）―パスカルの『パンセ』註解（九十五）」『心』28（5）号、平凡社、1975年、70頁）」という。

ト作成時、当初は「par la pensée du peuple」はなく、「par la pensée de derriere」と記されるはずであった。しかし、「par la pensée」が記されている途中で、「par la pensée de derriere」が追加されることになり、「mais par la pensée de derriere」と記された。このとき「non...mais...」の強調表現を用いるために、「non」が左の余白に書き込まれたと推定される。この修正箇所について、前田は「第一稿の際でも、先に進んでから考えが変わった場合には、それに対応して、既に記したところを直す必要が生じたところでは、止むを得ず余白や行間を使うことも起り得るのである⁸⁾」と述べている。ただし、もしこのような解釈が一概に言えるのであれば、複読法が示す推敲時の修正についても疑う必要がある。しかしながら、結論を先取りすると、このような修正は突発的なアイデアを記録するメモ書きを作成する段階であるからこそ起こることである。

本断章に見られるその他の加筆修正について、前田は後日の推敲の際に行われたものであると解釈している。ところが本断章のテキストを俯瞰してみるとそのようには一概に考えられない点がある。その点において本論は、余白に施されたものは後日の加筆修正であるという草稿読解の枠組みと袂を分かつ。具体的には以下の点である。すなわち、テキストが初めて書き付けられた際に「vn principe nouveau de la pieté」と記されている箇所が、上の行間の余白に語が書き加えられ、「vn」に「e」が追加され、「vne nouvelle lumiere que la pieté leur donne」と修正されている。また、「Vn autre principe plus Interieur」という箇所も「Vn autre lumiere superieure」と改められている。このとき「vn」は「vne」と書き換えられるべきだが失念されている。いずれも、「原理 principe」から「光 lumiere」への変更である。この修正は複読法によれば、余白が用いられているため後日の加筆修正とされる。一方で、本断章の末尾には、「selon qu on a de lumiere」とあり、この箇所は複読法によれば初稿となる。だがここに疑問が生じる。初稿では「principe」が基準として記されているのに、末尾になって「光」が登場し総括されている。「原理」に沿って考えるならば、「selon leur principe」となるのではないだろうか。したがって、「Ainsy se uont les opinions succedants du pour au Contre selon qu on a de lumiere」は初稿と考えるのではなく、書き付けの際に加筆されたテキストと捉えるべきである。

他の断章では「神は、ある人々の目をくらませ、他の人々には光を与えることを望んだということを原理として受け入れなければ、神の御業をいっさい理解できない⁹⁾ (断章 264)」とある。パスカルにとって「光」による判断基準は「原理」として解釈されていることが窺える¹⁰⁾。この書き換えの背景にはこの2つの要素

8) 前田陽一、前掲、67頁。

9) «On n entend rien aux ouvrages de dieu si on ne prend pour principe qu Il a uoulu aueugler les Vns Et eclaircir les autres» (RO, p. 45.)

10) パスカルの愛読書のひとつであるモンテーニュの『エッセー』では、単純な精神の持ち主は、よいキリスト教徒になりうる。一方、中程度の人間はキリスト教を愚かではかげたものだとみなす。そして偉大な精神の持ち主は、単純な人々とは別のよいキリスト教徒になりうる。そして、彼らは、探求により聖書のなかのより深く難解な光にまで到達すると述べられている (Montaigne, *Essais*, éd. Villey-Saulnier, Paris : puf, «Quadrige», 2004, p. 312-313. パスカル

の同化があり、そのため本断章のテキストを書き付けている間に即座に修正が行われたと推定される。

これらの加筆修正は、メモ書きにおいて「二つの無限」の断章に認められるパスカル原稿執筆法が遵守されていないことを示す例である。したがって、断章が作成される際にテキストが書き付けられる間にアイデアに変化があったと考えるべきである。つまり、複読法が示す初稿と後日の推敲という枠組みではなく、文章作成時の書き付けと、修正が施されたテキストとして読み取ることが求められる。

断章 124 書き付け時のテキスト

Raison des Effets

gradation. les peuple honore les personne de grand naissance les demy hables les mesprisent disant que la naissance n est pas Vn auantage de la personne mais du hazard. Les habiles les honorent *non* par la pens  du peuple mais pour la pens e de derriere. Les deuots qui ont plus de Zele que de science les mesprisent malgr  cette consideration qui les fait honorer par les habiles, parce qu Jls en Jugent par vn principe nouueau de la piet  leur donne mais les Chrestiens parfaits les honorent par Vn autre principe plus Interieur.

(斜体は加筆修正が施された箇所)

現象の理由

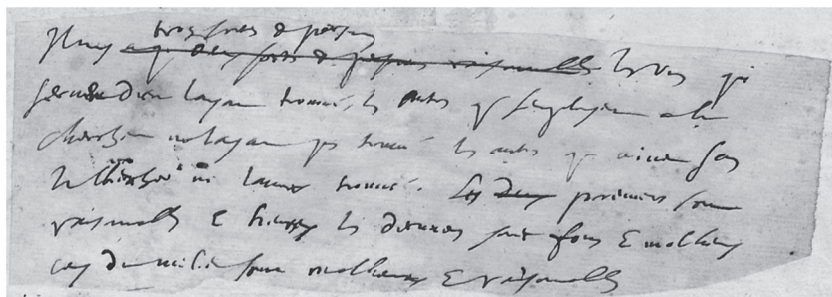
段階。民衆は高貴な生まれの人々を敬う。生半可な巧者たちは生まれは人の長所ではなく偶然のものであると言い、高貴な生まれの人々を軽蔑する。巧者たちは民衆の考えによってではなく、裏の考えによって高貴な生まれの人々を敬う。信仰家たちは、巧者たちによって高貴な生まれの人々が敬われるというこの考察にもかかわらず、知識よりも熱意を多く有しているので、高貴な生まれの人々を軽蔑する。なぜなら、信仰家たちは信仰の新しい原理によって判断するからである。しかしながら、完全なキリスト教徒たちはより内的な他の原理によって高貴な生まれの人々を敬う。

(下線は筆者による強調)

本断章においては複読法の考案者自らも認めるように想定される原稿執筆法に合致しない例と、書き付け時において文章の方向転換がなされている修正が見受けられる。このような例は本断章に限定されない。

が使用した『エッセー』1652年版では223頁)。パスカルはこのようなモンテーニュが示す三段階に関心を持っていたのだろう。断章 124 ではモンテーニュが示す三段階が細分化され五段階で展開されている。

III. 断章 192 (RO, p. 61)



Il n y a ^{trois sortes de personnes} que deux sortes de personnes raisonnables } les vns qui
 seruent dieu l'ayant trouué, les autres qui s'employent a le
 chercher ne l'ayant pas trouué les autres qui uiuent sans
 le chercher ni l'auoir trouué. Les [deux] premiers sont
 raisonnables Et heureux les derniers sont fous Et malheureux
 Ceux du milieu sont malheureux Et raisonnables

断章 192 おいても、断章の生成過程を検討する際に、パスカルの長断章における原稿執筆法が遵守されていない例がみられる。まずは、現在残されているテキストを確認しよう。

断章 192 修正が施されたテキスト

Il y a trois sortes de personnes les vns qui seruent dieu l'ayant trouué, les autres qui s'employent a le chercher ne l'ayant pas trouué *les autres qui uiuent sans le chercher ni l'auoir trouué. Les premiers sont raisonnables Et heureux les derniers sont fous Et malheureux Ceux du milieu sont malheureux Et raisonnables*

(斜体は加筆修正が施された箇所)

三種類の人間がいる。神を見出して神に仕える人々、神を見出せず神を探し求めることに尽力する人々。神を探すことも見出すこともなく生きる人々。最初の人々は分別があり幸福である。最後の人々は愚かで不幸である。その中間の人々は不幸だが分別がある。

本断章には二箇所消去線が引かれている。一箇所目では消去された部分の上の行間に加筆が行われている。この箇所を取り除いてみると次の通りである。

断章 192 冒頭の加筆修正を取り除いたテキスト

Il n y a que deux sortes de personnes raisonnables les vns qui seruent dieu l ayant trouué, les autres qui s employent a le chercher ne l ayant pas trouué les autres qui uiuent sans le chercher ni l auoir trouué. Les premiers sont raisonnables Et heureux les derniers sont fous Et malheureux Ceux du milieu sont malheureux Et raisonnables

分別のある人間は二種類だけである。神を見出して神に仕える人々、神を見出せず神を探し求めることに尽力する人々。神を探すことも見出すこともなく生きる人々。最初の人々は分別があり幸福である。最後の人々は愚かで不幸である。その中間の人々は不幸だが分別がある。

(下線は筆者による強調)

この箇所違和感があるように思われる。というのも、文章の冒頭では「分別のある人間は二種類だけである Il n y a que deux sortes de personnes raisonnables」と述べられているが、続く文章では三種類の人間の例が列挙されているからだ。この点を考慮すると、文章の論理関係を再確認する必要がある。つまり、パスカルは最初に二種類の人間を示していたが、後に三種類の人間を取り上げている。

複読法によれば、初稿は、行間や余白になされた加筆修正とは異なり、初めに書かれた文章としてみなされる。パスカルの原稿執筆法を考慮すると、彼は初稿を作成する際、修正が必要な場合には、その部分に横線を引いて消去し、直後に修正後の言葉や文章を書き加えていた。さらに、推敲の段階で修正箇所に横線を引き、行間や余白を利用し加筆修正を施していたと想定される。本断章において、冒頭の修正が初稿の段階で行われていた場合、横線の後に修正した文章を書く必要があるだろう。また、冒頭の修正に続く三番目の人間の部分も、行間や余白に追記されるはずである。しかし、本断章の場合、初稿時の修正方法とは異なるものの、それにもかかわらず、冒頭の修正が初稿の後に行われた推敲段階での修正であるとは考え難い。

では、この断章をどのように解釈すべきか。まず、パスカルはこの断章の冒頭で「分別のある人間は二種類だけである」と述べ、その着想を基に文章を始めた。そして二種類の人間について記した後、彼の着想は「二種類の分別のある人間」から「三種類の人間」という方向へと変化したと考えられる。加えて、「les autres qui uiuent」と記された箇所に注目すると「iuent」の部分から筆にインクが継ぎ足され文字が太く書き記されている。そして«trois sortes de personnes»も同様の太さで加筆されている。筆跡の観点からも3種類目の人間の出現と冒頭の加筆修正は対応していることが窺える。

さらに、三種類の人間について評価する文章で、「はじめの人々は Les premiers」と記されているが、この箇所が修正される前は「はじめの二つの人々は Les deux premiers」と記されている。ここからもテキストが初めて記されている時点で、すでに三種類の人間が想定されていることを示している。

この論理的な展開や加筆修正の内容を考慮すると、断章 192 においても、従来の複読法に基づく初稿や後日の推敲稿というものは存在しないと考えられる。むしろ、本断章のようなメモ書きにおける、アイデアの変遷として理解すべきだろう。つまり、この断章は推敲を重ねて練り上げられたものではなく、アイデアを書き留める最中に変化が生じた例であるといえる。そのため、最初のアイデアとその後の変化を経た最終的なアイデアの二つに分けて読み取ることが求められる。最初のアイデアは以下の通りである。

断章 192 書き付け時のテキスト

Il n'y a que deux sortes de personnes raisonnables les vns qui seruent dieu l'ayant trouué, les autres qui s'employent a le chercher ne l'ayant pas trouué

分別のある人間は 2 種類だけである。神を見出して神に仕える人々、神を見出せず神を探し求めることに尽力する人々。

本断章における加筆修正は、アイデアの変遷を辿るものであり、その変更は内容が書き留められている最中に行われている。このような初稿における加筆修正を理解するためには、断章の作成背景に目を向ける必要がある。

IV. メモ書きにおける加筆修正

パスカルの執筆活動は 1) アイデアの記録、2) 紙片の整理・分類作業、3) 論説文書作成の三段階から成ると考えられる。

1) アイデアの記録では、大きな紙片に様々なテキストが書き付けられる。ここでは頭に生じた考えを記述することに主眼が置かれる。

2) 紙片の整理・分類作業では、第一段階で大きな紙片上で作成されたテキストがアイデアごとに切り分けられ、内容に応じた束 (liasse) の紐に通され分類される¹¹⁾。

3) 論説文書の作成では、第二段階で作成した断章を元に、内容が構成され、文書が作成される。

現状、『パンセ』草稿集には、これら三つの段階で作成された断章が混在している。本稿で取り上げた二つの断章は、いずれも執筆作業工程の第一段階で作成され、その後第二段階で断章が記されたテキストが大きな紙片から切り取られ、タイトル付きの束に分類され保管されていた。

『パンセ』草稿読解の観点からいえば、これまで 1) アイデアの記録と 3) 論説文書の作成におけるテキストが混同されている。すなわちパスカル独自の原稿執筆法は彼が書き付けたどのような文章においても、普遍的に守られていると考えられていた。したがって、『パンセ』草稿を検討する際には、まず対象の断章が上記の執筆工程のうちどの段階で作成されたかを鑑別し、適切な読解手法を採る必

11) 第二段階までの作業仮説については先行研究においても確認される。Louis Lafuma, *Controverses pascaliennes*, Paris, Luxembourg, 1952, p. 45-51.

要がある。

従来ではパスカルがはじめに紙に書き付けたテキストを、どのようなものであれ「初稿 *premier jet*」と指してきた。しかしながら、この「初稿」には二つの性質のテキストが含まれているように思われる。上記の三段階の執筆工程のうち、1) アイデアの記録と 3) 論説文書作成における初稿ではその性質が異なる。前者は作者の想念が初めて言語化されたテキストであるのに対して、後者は既に作成した文書をもとにいわば清書する形で作成されたテキストである。

これらの異なる性質の初稿を区別するために、本稿では前者を「書き付け *premier jet*」、後者を「第一バージョン *première version*」と呼称する。「*premier jet*」の「*jet*」には「新芽」という意味があり、この言葉は文字通りテキストの萌芽状態を指すのに適している。日本語ではこの意味の「*premier jet*」を「書き付け」という言葉で示したい。というのは、「書き付け」という言葉には、「心覚え程度に書いたもの¹²⁾」という意味があり、まさに第一段階における作業を指していると思われるからである。

「書き付け」において、主たる目的は、「頭の中で廻るさまざまな思想の形をなさない鉛筆画¹³⁾」を記録することである。このことが何よりも優先されるべき課題である。確かに、テキストを書き付けるときには、普段の原稿執筆法に従って一行おきに行間を確保して文章を書くのであろうが、あくまでもメモ書きであるので、この時点では自分が今考えていることをよりよく表現できる修正を思いつくとすれば、これを直ちに書き留めなければならない¹⁴⁾。本稿で取り上げた二つの断章にみられる文章作成時における加筆修正がこれに該当する。

では、パスカルが十分な余白をとって後に文章を練り直すことができるような仕方で、文章を書き付ける配慮はここでどのような意味を持つだろうか。これらの書き付けは、次の段階でそれぞれ切り取られ、しかるべきタイトルが付された束に分類される。そして、論説文書として書かれるべき必要な材料が揃う時を待っている。したがって、第一段階のメモ書き作成の時点では、必ずしも余白を使っているとは言えないというルールを自身に課す必要は無い。むしろ、この段階では、何よりも頭に浮かんで、そして消えていく想念を逃すことなく、写し取っていくこ

12) 「書き付け」、『大辞林 4.0』、三省堂、2019 年。

13) サント＝ブーズが収集した資料の中にニコルの執筆作業に関する証言があり、間接的にパスカルの執筆作業について窺える。「彼 [=ニコル] は自分の行くことについてよく考える。誰も彼のように著作を練らなかった。彼が紙に書き付けた最初の創作物は、彼の頭の中で廻るさまざまな思想の形をなさない鉛筆画にすぎない。しかし、彼が 1 枚目から作成した 2 枚目では、この混沌が解きほかれ始める。そして、3、4 枚目では書類は完成したものになる。これこそまさに、著者という虚しい名声を得るための苦勞である。この骨の折れる作成方法を彼に教えたのはパスカル氏であるといえる。(ニコル氏はパスカル氏の模倣者にすぎず、知っての通り、模倣者にはオリジナルの価値はない。) というのは、パスカル氏はほとんど同じ方法を行っており、ニコル氏はその欠点までも真似することを讀んでいたからである。」(Sainte-Beuve, *Port-Royal*, éd. Ph. Sellier, Paris, R. Laffont, «Bouquins», 2004, t. I, p. 1084.)

14) 断章 459「[...] 逃れ去った考え私はそれを書きとめようとしていたのだが。その代わりに、私はこう記す。それは私のものを逃れ去った。」«pensée échappée ie la voulais écrire i écrits au lieu qu' elle m' est échappée» (*Première Copie des Pensées*, Bibliothèque nationale de France, département des Manuscrits, Français 9203, p. 333.)

とが課題であり、このことが最大の目的である。

V. むすびに代えて

本稿で取り上げた断章 124、断章 192 はいずれもまず大きな紙片にテキストが記され、後に大きな紙片から切り取られタイトル付きの束に分類されていたメモ書きであると推定される。テキスト自体はアイデアを書き留める際に作成され、「書き付け premier jet」において加筆修正が行われていた。複読法によればテキストを作成する際には後日に加筆修正を施すために紙片の上下左右と行間の余白を確保するという原稿執筆法が採られているという。そのため、確保された行間に施された加筆修正は後日の加筆修正となるが、二つの断章においてはテキストの書き付け時に修正が施されたと解釈される。このような書き付けにおけるルールの無視は他の断章においても確認される。それらを偶然起こったこと、例外的な事象と考えるのではなく、パスカルの執筆工程の第一段階においては、パスカルがこのような原稿執筆法を守る必然性を見出してなかったということを示している。

(大阪大学博士後期課程在学中)